

近世  
怪談  
霜夜星

卷之四

遠13  
1299  
4



13  
1299  
4

近世怪談霜夜星四卷

東都

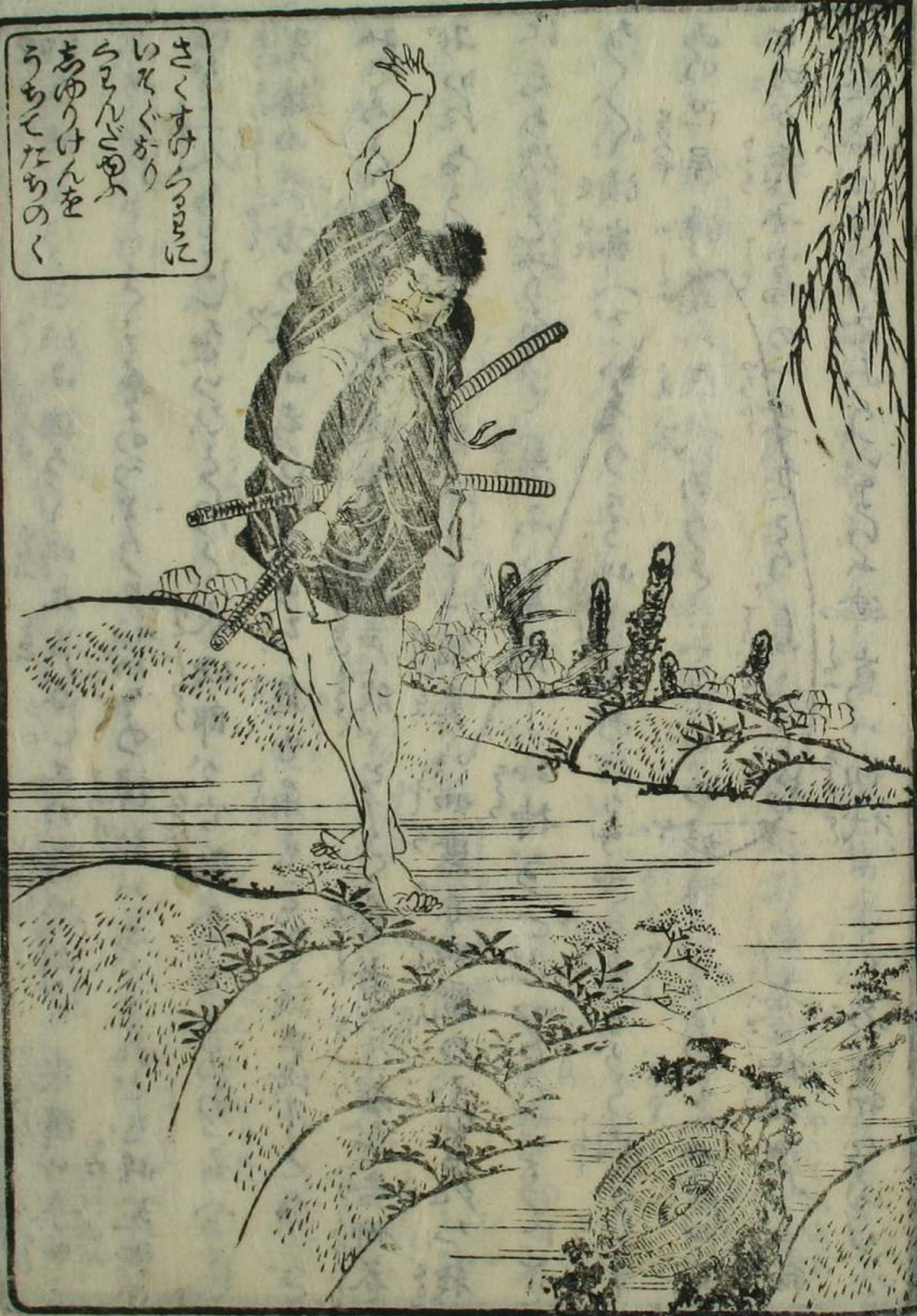
種彦著



第六回

編ご第の狂人  
古屋の木まろ

そのとらさたりしもの別人あはれ求次郎が掣鞋作助主人のうそり  
かたれをなぐらひ病免けくもり頭禱をいで花巻へといきぐわり土まの  
下ふ人殺ことゆひと操動あり何竟やんと足ぶやみそみそふ  
鏡鏡肩尖をわきつく柳の樹ふんくしたん抜とりえ色ハ割掃枝  
のわしるりあり色あくとさそよものい何地の人あんと幸い無きれ  
月の夜とあつたやうりれば玲瓏さる影ふさしるるふ豈くかさんや  
主人求次郎鮮血ふちまれ伏たりれば作助怪然とらちかたれ天を



さくすけらふに  
いそぐかり  
らふんごふ  
あゆりけんを  
うちてたちのく



の家不いたり何と分説るべしと。石斗そののげせしあやあるらぬ。  
 家不かえることへ志す。路ゆく人おひひらひ私言のそいあき止  
 ぬ。遂不狂氣もあやしくあらず。あるは泣あるは笑。あきしく  
 ぞひせむやのあまびとらなひつ。編ぶ帯を肩ふかけ。志賀山が  
 かとりあらし一日二日さやうい。街上の笑語とありし。快保が  
 許りも此責を因む。中まのぬえおめい。人をさしてさうり  
 りくしと。いよ彼所をさうりし。今日此所ふくさうりあど。  
 街説ふさくのみふく。遠不尋あひむ三日の夕残草。うら牛嶋  
 不りく。酒場あく。狂死不ぞ亡ふり。求次郎金吾の家をつぐ  
 ぶ。子あく。快保の金吾不別く。うら。近辺の寺院へひにらり。乗  
 門とあり。はが重々。愁ひあやしくはどく。死さる。さだめが

とい人おふく。作助の家不うら。縁故を告ぐ。ら。彼鏡鏡お。こ。  
 掃枝をさる。ふ南無阿弥陀佛の文字あり。うら。かりい。小。曾  
 法善寺花見のよ。求次郎誘引。卯月官太夫とい。度。一。所  
 持る。せし掃枝ふ。作助も。見か。ほ。あ。色。バ。求次郎を。殺害。せし。い  
 のどが。為。業。と。明。白。な。れ。ど。復。讐。の。心。も。あ。ら。ず。や。求次郎が。さ。う。り  
 お。い。さ。る。金。一。百。兩。ぬ。さ。と。ら。雨。風。の。ま。げ。し。る。あ。亡。命。を。し。ぬ。さ。こ  
 ち。ふ。び。な。り。り。あ。と。い。う。あ。る。と。う。ら。や。か。ら。る。於。譯。が。女。の。性。の。慳。ま。さ。こ  
 ろ。り。あ。の。怨。氣。消。散。せ。び。花。方。伊。蓋。の。両。家。さ。る。が。ら。小。釣。絶。し。  
 此。一。度。を。入。つ。て。入。り。し。ぶ。こ。と。あ。ら。う。の。あ。と。ふ。ま。や。ひ。あ。き。者。と。あ。く  
 主。顔。不。私。草。あ。ら。う。の。と。へ。り。う。さ。る。う。年。を。ふ。ま。さ。く。の。ら。求次郎が。古  
 舎。を。買。と。り。あ。る。医。師。ま。さ。く。ふ。ら。び。木。枕。の。怪。と。あ。り。し。と。白。蛾。が

とんこまをいしを  
あつくさるゝあ  
こもあといか  
たゞありとを



宿夜星巻之四



宿夜星巻之四

牛馬向ふ出でり

第七回 鐘倉の怪変

かあううと少えしい。御所臨管領館あとかど。土人ともをさして此  
所あらまじ彼まありしと物語とと皆田圃のともあり。実やら  
も木もあひぬ。秋のにおさるく空いた苔をさるふやまかせと  
詠せしも置あり。さとしど驛路市町のよだりひへ古木倍し。旅店所  
せれまど棟をまどへ諸国の高客あみあひあり。美酒海鮮一とし  
かりとも夏あく。水涸く山麓まら平安の地ともいへ。彼伊志緒が  
ト居をうとあし。まこと一街小遠ざかりらうらわ松葉が谷扇が谷小橋  
と。前山山川のうらまはあり。掛樋の水人力をかたび花小雲小風水を

一ツの草庵あり。常言あも。夏あれは寒をのぞれ。冬あれは暑あも  
つべ。去年の末次郎が横死らう伊志緒の家もさえ伏保の大は  
やまひあくと世をさらしし。於澤がさうらとま勢あつた。年月さ  
みつと。やうやくまうをやまんどらじり。頃ハ神無月ともい  
孟冬ありらる。伊志緒於花ハ二人の愛子とら小椽先小ありて詠  
と。金鳥ハ西山小没し。玉兔ハ杉戸の杜小さうい。戸小情つ  
と。魚鱗のさくつらあり。大みやりむねをさえぬ。不斗伊志緒於花小  
むらう。さだあうこのともかたりい。彼伏保が館小居りし  
と。珠小汗水の清あさし。とらひ色られ。花子のい。と。さ  
と。よりい。女肆小ありい。膝子とあらん小ハ。おのぬ人小笑を

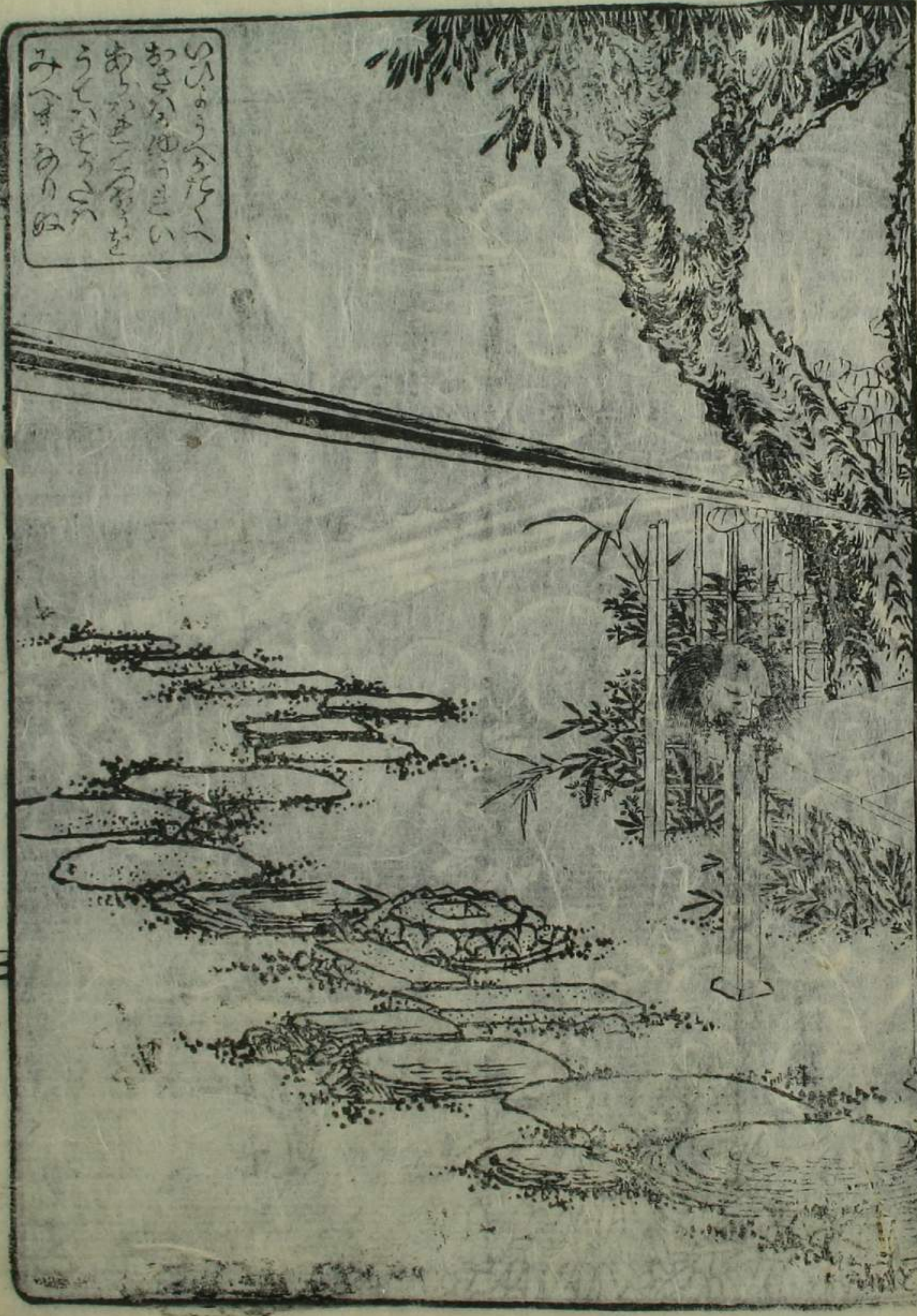
曾友屋巻之四

めづかし。芭ふらら客をまねぐんひあしるふ。今ひくひりひり。情入ふ横陳まし。愛子を二人まぐりふりし。砂の中にひくひる玉あや  
 あるらめといひり色。伊多誘うらひ。既小常言も明珠連城。たうらふあは子孫をりく。宝と。愛子の榮也。未むと。花の悦女  
 らひなしといふら。や幼子があひみく。於村の花ふらり。母さよねあはり。ねろし。とあやゆ色。於花の悦女  
 かゆを誘引く。桐房のい。伊多誘ひ。あやあ。影ふめく。月のひろをら。柱ふ。あり。柴の。かをほ。と。噴ふ。他人。い。女。愛。雨。の。あり。と。答。の。正。く。女。声。伊多誘。庭。折。戸。の。文。

ある。黒髪を。青。女。紡。居。京。素。石。敵。の。伊。多。誘。何。者。あり。や。と。荒。風。水。の。梢。を。と。え。村。雲。小。か。と。月。の。の。の。音。し。柴。折。戸。と。同。あ。水。細。し。と。音。し。柴。折。戸。と。同。さ。と。び。り。を。つ。床。の。の。足。音。の。且。と。姿。目。ふ。の。代。醉。篇。小。野。狐。觸。體。を。仕。事。を。百。礼。一。婦。人。の。形。と。化。し。西。陽。雜。俎。小。狐。尾。を。と。火。を。記。此。地。の。南。へ。箱。根。足。柄。関。の。八。重。山。巖。と。し。又。瞿。麦。の。諸。越。原。と。や。ん。荒。野。小。隔。と。遠。く。ね。の。狐。狸。の。り。を。も。知。る。と。四。登。を。さ。ん。と。足。す。つ。小。先。の。女。の。伊。多。誘。も。中。後。堂。小。の。顔。人。あ。げ。え。

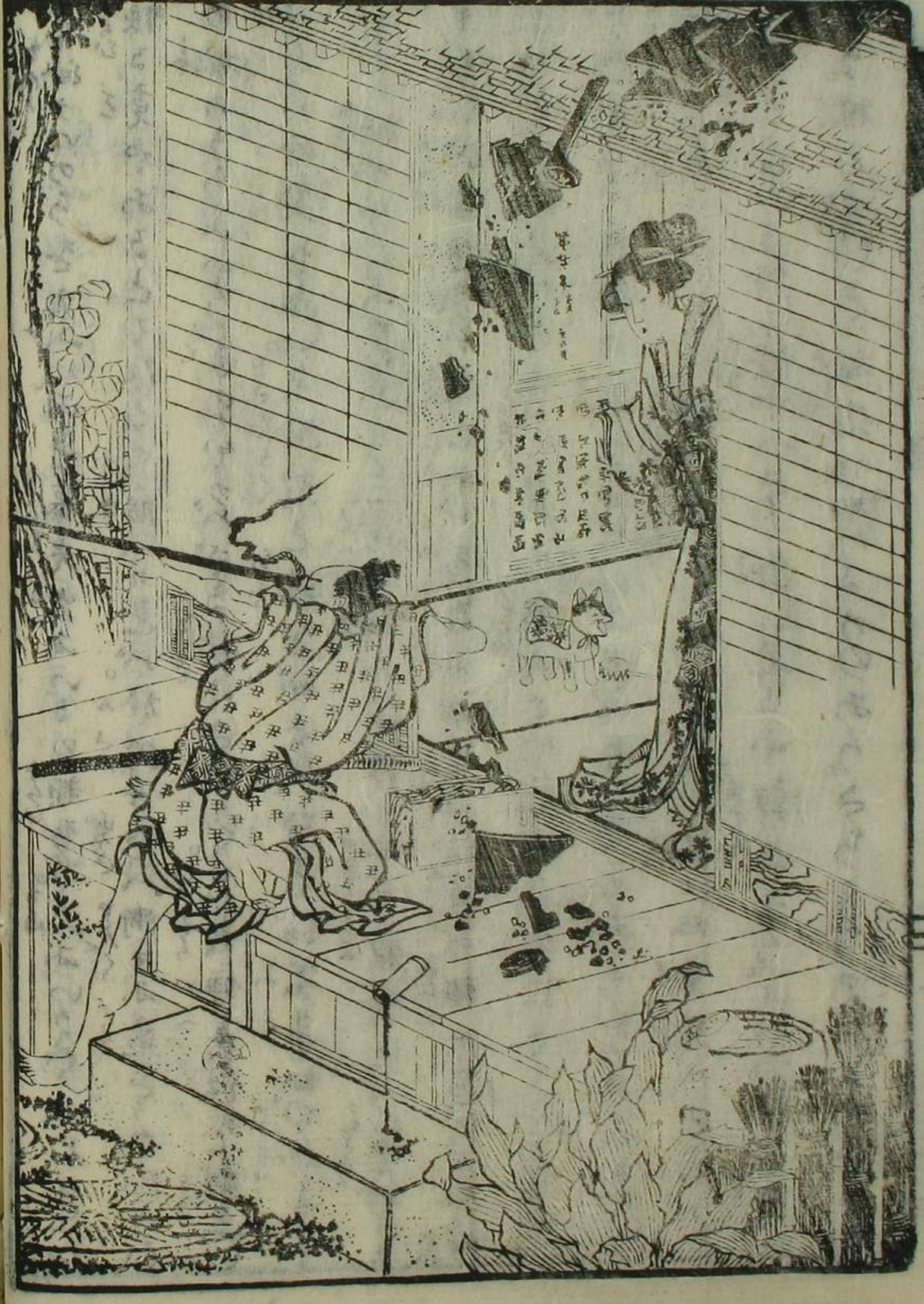






のひょうふかたぐい  
あまのゆきさの  
あまのゆきさの  
うしてまろこ  
みへありぬ

園遊草子



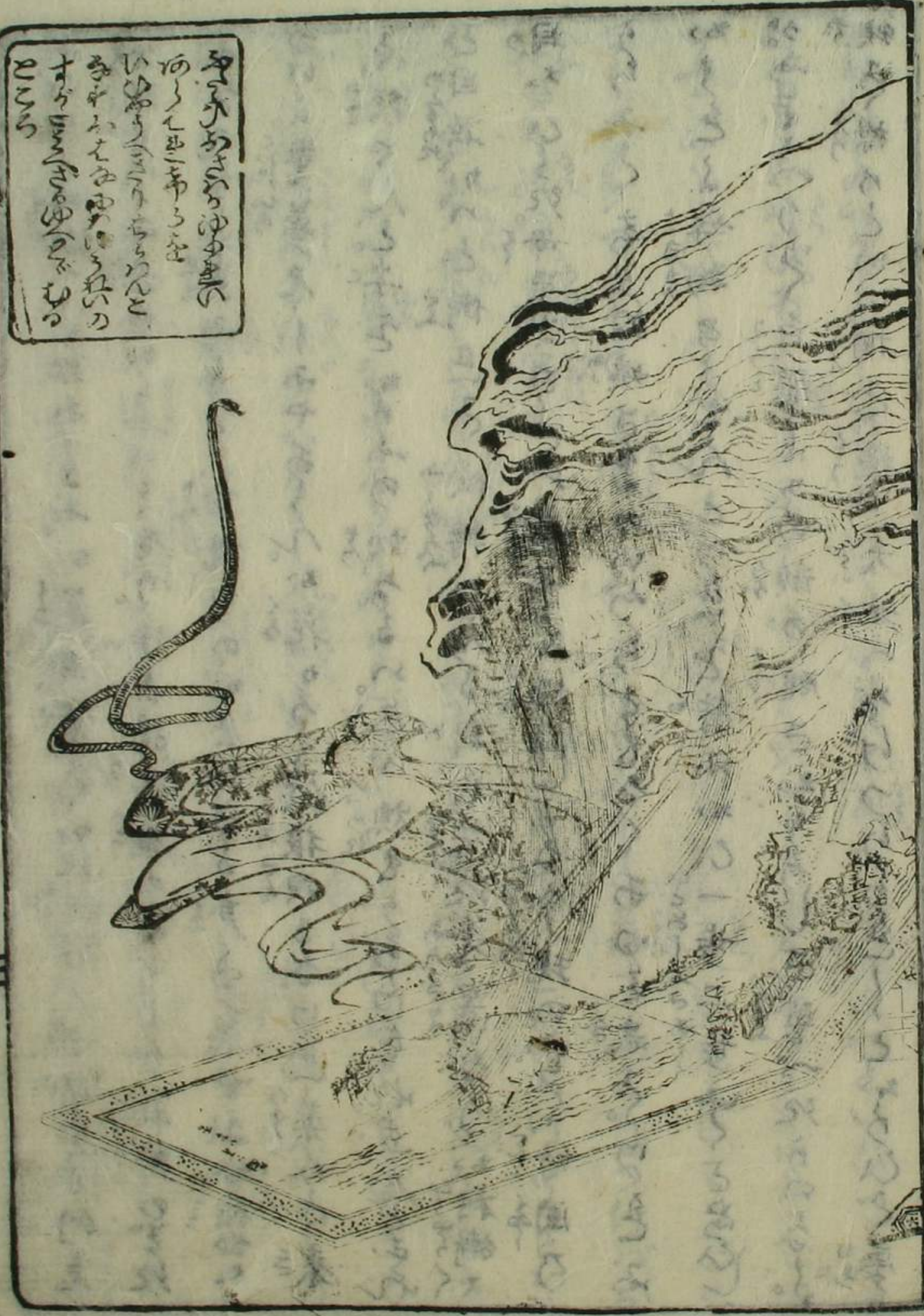
園遊草子





ことあるれと布あく捲夜もあけさるれ止む悦五郎を野辺送  
 するし夕一行の煙とあはしめてぬ。かくてより伊去猪花子の鬱と  
 更あとのち候懐の璋を棄て林の花を度みちうせしめひまれど  
 村兒がさうろふあるをんく。まはまや住吉の岬もあふてふ笠草と  
 ある。二月三月ほどしり。彼伊去猪が創瘡をうらなれど。日あはびして  
 全く癒されども何とやうん瘡をいへ。瘡も腫あがり遂に腫れと成  
 医師をよめぬくもせまじしと何と名づくべきともいへどと答ふ  
 されりも膏やをいどし薬を勅せど。その験且と多く今へ立居  
 まりぬふも口は嘘べし。まじ一節の珍更いどとく。毎夜四更のふり  
 ひいとあひふふ。何方もなき。氣數多ありまうと。伊去猪、腫り  
 らりいづも膿汁をうしりふ。やめ心持らさといふとやうもなし。花子の

こと奇怪なる夏ふかの枕方ふありと。鼠をいひまうりく。さうも  
 痛堪らぬ。かくる夜毎ふし。遂に伊去猪が身軀爛れんとく  
 いのちも絶へうぞえへなる悲歎の中ふも。花の一計をいふ。長植の  
 うらふ伊去猪を伏せあり。息出の穴をうらあり側ふやうり。唇  
 れ。まじしと鼠も来らざりし。ふむふらうとび。五更のふらぬいと  
 かりる頃。あやうふ音もあざりし。ゆえ長植のふたをひらけ。さう  
 あとちのりり。まじやといひつ。伊去猪を見る。小豆討んや。裡ふ  
 尻壳端く。白黒斑あるもの數ある。つらつら。いんせん。と。鼠のけ  
 べ。外の氣いとふあつちるとええし。が。忽陽冬のと。女の形と  
 化し。外の方へうら出る。お花の標めとあり。水を洒るうどく。さう。長植と  
 側をたぬ。村此音あやがうれ。らん。側ふ伏居る。が。鼠跡をかうり。声を



此物名曰蛟  
蛟者水中之龍也  
其性嗜食人肉  
故古語有蛟龍  
之患

蛟龍之患









おとろけをせりて  
たぐさるをあり  
さあぐのちりりれ  
いりてさあぐさ  
あさぐさ

雷夜星巻之四



雷夜星巻之四

らうとつ。阿絶僻地周章死をるをを。か村微笑くむらじふおん  
 かり。いふ伊去跡水小濁とく死とふ。つげとく苦くからんといひををり。  
 恰も橋をさそほぐとく。二人一度不撞と倒と既不息とえ死うせ  
 たり。ふのとれ一團の鬼火陰ととくと面の方へ出。いらことあめく  
 人声とく介望も足とり。又明日の夜も来らちとわやくとつらふおを。  
 花悲とく悲とく半へ死せる人のとく。うととくふ声立と泣う母ふ  
 可はもあ。乱心のと成るがふれも定むる因縁ふや。夜ありとくらり  
 一思つた。近鄰の人く不懺悔のとらとく。有枝有葉をりのとらり。  
 伊去跡が亡骸とり。あさめんとあふふ。前夜のらけ紐はる海首ふま  
 とくくもれぞ。村兒へ俄不死とれ。身とあつくもくらげ。結ふ不  
 からぬ顔ハセをみる不もく。胸つとと。花子の又も狂氣のとく

波の回ふらりとしと。うや妻が身の上不恨る罪もあふふあれ。の子ふ  
 何の咎ありや。三途川ふやうひと。母よくととらねんふ。あはに路あり  
 おりいんと自害せんとあしむるを。近鄰の人さやどふひむ和え  
 伊去跡村兒が柩をうらべと寺院へかたり。彼伊去跡が遺言なれ  
 べ。かかぬ命もあがらと。尼ふあり。菩提をとげらひあへと。か花ふ  
 ぞられば花子も入との言葉をうけ印と。又明日の夜も来らちといふ  
 声の耳の底不流りとく。恐しく。其日のうら小家賊とくこく  
 あさめ墨の衣ふおの涙をまがり。三界無庵樹下石上のたかなく  
 と行方定ひ先ゆらぬ。あといふあ。支うりやか。それハ龍三ふ  
 邪娘ハ五戒の。一うらびや。つまむべの要あり。あうら。一あり。彈子が  
 雲鬼此地ふとらう。陰雨のとれ。い。好鬼火飄蕩とし。爰子因縁

かこふ燃え又暗夜の夫ありぬい遠く車の轆音をしく眼みくると彼  
 車ふあひし者の三年をまねぬ命終るらく土俗やとをひし杉戸の  
 杜の鬼火乱橋の空車あど一席の茶話とありるが遙年ありく後  
 東福寺千人結制の師家象海和尚岡東小杖をひれた多刺の地小  
 遊行やしく土人の話説をゆめひ譯子があるしく墓をさる  
 一七日讀經ありし大位の教化あり。あらわんえく奇怪  
 更もあらししとまん語つてく。あらしより何等物語あやら  
 ぬ。あらしの巻をひつてくあらしん。

霜夜星四巻 畢

